長崎新聞　2025年（令和7年）7月28日 月曜日

大浦天主堂建設の原動力に

長崎居留地ドキュメント　ブライアン・バークガフニ　■23■

レオン・デューリーの功績

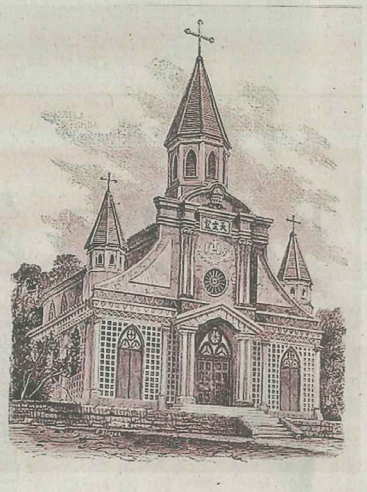
レオン・デューリー（中央）と済美館の生徒たち（部分、筆者蔵）

安政6（1859）年夏から約3年間、フランス人ではない3人の欧米人が駐長崎フランス領事代理を務めた。1人目であるスコットランド商人のケネス・マッケンジーは文久元（1861）年6月まで、私邸として借りていた妙行寺近くの日本家屋でフランスの国旗を掲げた。その後、スイス商人のウィリアム・ゲイマンスが短期間就任し、ポルトガル商人のホセ・ローレイロがその後を引き継いだ。

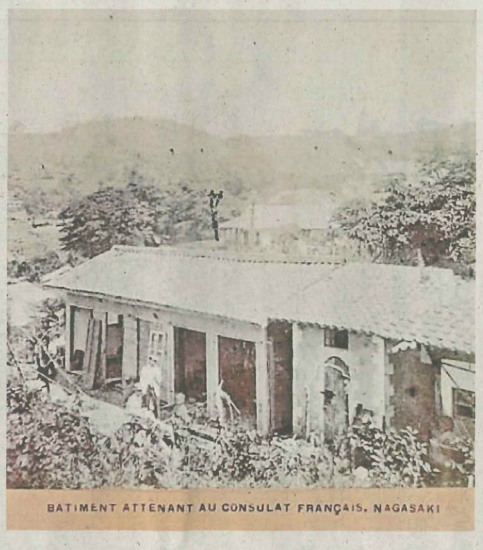
最初のフランス出身フランス領事は、レオン・デューリーだった。1822年にフランス南部のブーシュ・デュ・ローヌ県で生まれた彼は、マルセイユで医学を学び、文久元（1861）年、徳川幕府が函館に計画していた病院を指導する医師として日本へ派遣された。しかし、幕府の都合により病院建設が中止となったため、駐長崎フランス領事として赴任することになった。

同年11月に来崎したデューリーは、大徳寺にフランス領事館を仮設し、その後、南山手7番地で新築した住宅に活動の場を移した。あまり知られていないが、翌々年にパリ外国宣教会の司祭たちを長崎に招き、大浦天主堂建設の原動力となったのは領事デューリーであった。

外交官を務める傍ら、デューリーは日本人にフランス語を教え、慶応元（1865）年、大村町の旧長州藩屋敷で開設された「済美館」（旧洋学所）の教壇に立った。生徒の一人だった松田雅典は、デューリーが食べていた缶詰食品に衝撃を受け、デューリー指導の下、日本初のイワシ油漬けの缶詰試作に成功した。フランスで生まれたこの長期保存法は、松田雅典によって「無気貯蔵」と呼ばれた。缶詰試験所は、現在の日本銀行長崎支店の場所にあった。



フランスのカトリック系雑誌の表紙を飾った大浦天主堂の銅版画。明治5（1872）年（筆者蔵）



南山手7番地のデューリー邸は在長崎フランス領事館となった。フランス語のキャプションには「長崎のフランス領事館に隣接する建物」とある。背景には大浦天主堂が見える（筆者蔵）

日本初の缶詰製造も指導

明治3（1870）年、長崎におけるフランス領事館の閉鎖に伴い、レオン・デューリーは京都府の招聘に応じて官立の京都仏学校でフランス語教師となった。生徒に慕われた彼は、京都仏学校が廃止され、東京大学の前身である開成学校へ転任することになった際、数十人の生徒が彼に付き従い上京したという。

明治10（1877）年にフランスへ帰国した後も、デューリーは日本の発展に注意を払い、生徒たちとのつながりを大切にした。明治18（1885）年、日本での功績により勲四等旭日小綬章を受章し、マルセイユの名誉日本領事にも任命されている。明治24（1891）年この世を去った。享年70。

明治32（1899）年、デューリーの教え子たちが寄付を集め、京都の南禅寺に彼の功績を称える記念碑を建立した。昭和11（1936）年に関西日仏学館内に移設されたその記念碑は、現在も同学館の敷地にたたずんでいる。

（グラバー園名誉園長）

月1回掲載します